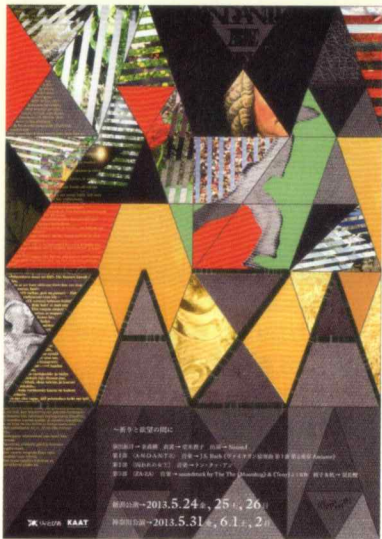




ZAZA ~祈りと欲望の間に

演出振付：金森穰
衣裳：堂本教子
椅子&机：須長檀
出演：Noism1

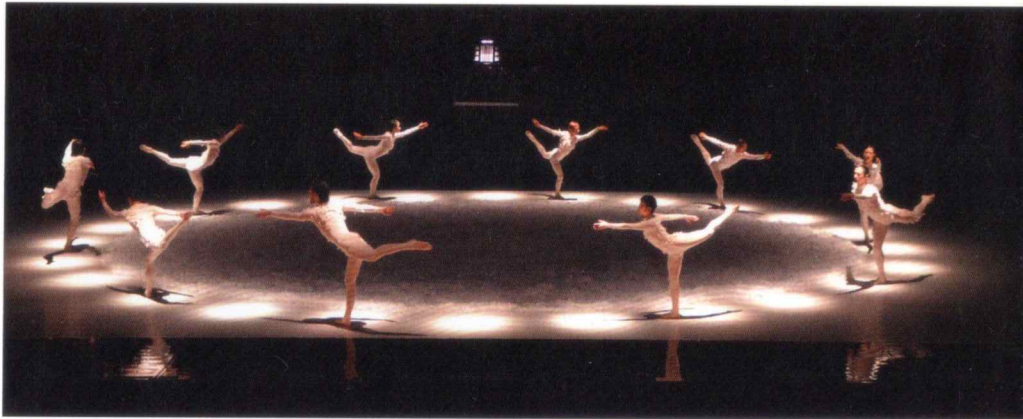
【新潟公演】
2013年5月24日、25日、26日
りゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館〈劇場〉
【神奈川公演】
2013年5月31日、6月1日、2日
KAAT神奈川芸術劇場〈ホール〉

身悶えするほど嫉妬せよ！

『ZAZA ~祈りと欲望の間に』

いかなる因果関係も介在してなどいないというのに、そこにいつも違う「不吉さ」を感じていたことを明かしておこう。それは今回の公演に先駆けて、金森穰やNoismメンバーのパブリシティへの登場頻度の高さが醸し出した不安感であった。待ち遠しい気持ちと同時に生じてくる得体の知れない不安。それは先ず、宮河愛一郎の退団告知という形をとって寂寥感に姿を変えただけでなく、公演直前に、もうひとりの「劇団ピンクドクロ」、藤井泉にとっても最後のステージになると発表されるに至り、更に大きな喪失感となってしまふ。日に日に「ふたりの姿を網膜に強く焼き付けておかねば」との思いが募るなか、新潟での初日の反響をチェックした際、思ひも寄らないツイットに呆然となった。「空席が多い」だとい？ 俄には信じられずにいたのだが、やがて、身中に爛り続けてきたあの「不吉さ」が現実のものとなってしまったのではないかと感じられて仕様がなくなる。そして、りゅーとびあでの2日目と3日目（新潟公演の楽日）の公演に足を運んだとき、実際、ぐるりを見回して、自分の目でそれを確かめてしまふに及んでは、途端に、情けなく、申し訳ない思いが込み上げてくるのを如何ともしがたかった。そのときの居たたまれなさ。

この文は、そんな思いを基調に綴られるだろう。同時に、この文で私が全力を挙げて目指すところは、『ZAZA ~祈りと欲望の間に』を観ないで済ませて、金森穰に「正直悔しい」と連発させてしまった人たちの心中に、激しい嫉妬心を掻き立てることを描いて他にない。あなたがこの公演に背を向けたそのとき、世界にはあなたを置き去りにして回っていた側



第1部〈A・N・D・A・N・T・E〉

音楽：J.S. Bach《ヴァイオリン協奏曲 第1番イ短調BWV1401 第2楽章 Andante》
出演：宮河愛一郎・藤井泉・中川賢・真下恵・青木枝美・藤澤拓也・宮原由紀夫・亀井彩加・角田レオナルド仁・石原悠子

面が確実に存するのだし、この作品を観ていたら蒙ったはずの自身の変容はついで体験することなど叶うまい。あなたがどれほど祈り、欲しようとも、現時点ではこの傑出した作品を目にする機会を得られないうえに、今回のキャストで観るということになれば、それは金輪際あり得ないことなのだ。だから今、身悶えするほど嫉妬せよ！と。

第一部〈A・N・D・A・N・T・E〉。同じJ.S.バッハでありながら、前回ダブルビル公演『solo for 2』の響きとは趣を異にし、5分強の音楽が20分に引き延ばされて再生されるなかを、白を基調に、「超俗」の風情で、円軌道を描いて、緩やかに、この上なく緩やかに、「あ・ゆ・む」者たちの登場。

「欲望」から極めて遠い面持ちで運観したかのように中央に丸く設えられた無数の「白い薄片」の周りを「あ・ゆ・ん・で・い・た」はすが、突然の大音声（それは、1秒に圧縮された同じバッハであるため、「音」的な統一感を得て我々の耳に達する。）を契機に、時間が変質し、人は為す術もなく「白い欲望界」に引き摺り込まれていく。「白い欲望の薄片」は人にはさも無頓着に、普段見慣れた速度で舞い、あるいは身体に纏わり付く。聴覚的に、視覚的に表現された時間の「均質性」の否定。「欲望」の時間。そこで人はもがき、足掻き、他者に関心を惹かれ、または関心を失い、移り気に相手を取り替えて絡み合う存在に姿を変える。いくつものペアが同時に踊るさなか、自分の相手ならめ第三者に気を惹かれつつ、当面のペアとの間で「心ここにあらず」の風情を踊る、視線と身体の乖離が出色だった。各人の人生の平滑な時間は、身を貫く「欲望」の轟きと共に動き出し、いつとき、安定や均衡を欠き、みな一様に冷静ではいられなくなるのだが、それだって長続きするものではなく、やがて安定や均衡へと収まっていく他ない、その繰り返し。それらは全て、終幕、上座の奥に、俯瞰する主体として登場する、不動の井関佐和子によって回顧された時間であるという仕掛けを明かしながら、やがて、人の「欲望」をまるごと肯定するべく、美しく紙吹雪が舞い落ちるだろう。

第二部〈囚われの女王〉。うって変わって、目を奪う色、3色。女王監禁の舞台が陰鬱な古城とされているのならば、色の持つ「毒」むき出しの、あの発光するような赤、緑、あるいは黄は、まさに人のぎらつく「欲望」の現前そのものであり、声高に、示威的に、自らの勝利（triumph）を叫ぶような、圧倒的な色彩である必要がある。

結局は実現を見なかったものの、当初、第一部のバッハ同様、トン・タツ・アンの手により、ある種の変形を施されるはずだったJ.シベリウスのバラッドの下、4人を踊り分ける井関佐和子の「神懸かり

的な」としか言いようのない身体表現の凄さ。それは骨格も肉付きも体積も異にする4人の別人格がただひとつの身体を舞台に、音楽の進行に合わせて、それぞれの特徴が刻印された所作を介して、くるくる入れ替わっているようにしか見えない、まさに神業。なかでも、女王を見張る門番の居丈高な姿と、僅かな隙をついて、助けを求めべく、その右腰の陰から客席の私たちに向かって押し広げられる女王の懐きの左の掌は、その表情を全く異にし、どちらも井関佐和子というひとりの人間に、同時に、属するものであるという至極当然な事実が受け入れ難い程である。凝視すればするほど、目を疑う他にない。最後にもたらされるカタルシスを含めて、圧倒的なソロ・ダンスとして長く語り継がれることだろう。

第三部〈ZAZA〉。先ず提示される「欲望」の象徴たる林檎は、人祖の始原から、日本的な戦後動乱期の猥雑なパワーを経て、appleコンピュータに代表される現在までを「通史的」に想起させるアイテムと言える。常にそれまでにない新しいパラダイムの立ち上げと同時に登場してきたものでもある。

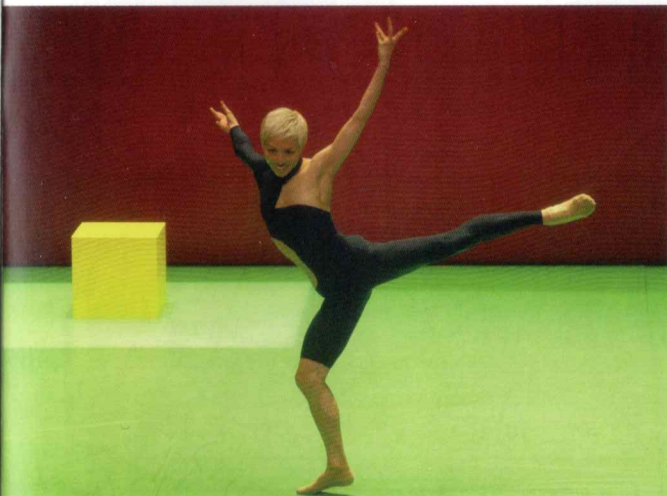
前景、「欲望の対象」としての井関佐和子はまるでマネ『フォーリー＝ベルジェールの酒場』の女性給仕のように、蠱惑的かつ虚無的無表情で登場し、他者の欲望の視線に晒され続ける。もしかすると、私たち人間など、生物進化のいついかなるモーメントにも必ず存在する連綿たる「欲望」そのものの、まさしく「間（はざま）」で、自らが「欲望」の主体であると勘違いしながら、浮かんでは消えていく泡沫に似た存在に過ぎないのかもしれない。人が「欲望」する主体であるという意識など滑稽なものだと、井関佐和子の無表情が、あるいは、男性陣も女性陣もお互い諸譚味たつぷりに繰り出す、紋切り型の足による誘惑が、雄弁に物語っていたはずだ。終幕、前景で踊られる横一列のダンスからは各人の特徴が見事に剥ぎ取られている。金森穰によってメンバー個々の「欲望」が吸い上げられ、それを踊っていたはずなのに、やがて全ての「欲望」が、結局はほぼ同様で、月並みな相貌に収まってしまうのを目にするとき、私たち一人ひとりなど、私たちを越えた「欲望」の触手に過ぎないくらいに考えておいた方が気が利いているというものだろう。THE THEのサウンドトラックに媒介されて、「フィルム・ノワール」的な味わいのもと、R.ドーキンス『利己的な遺伝子』に似て、人間を「欲望」の乗り物に過ぎない存在と見ようとするかのような、冷めた人間観を存分に堪能した。

最後にもう少し丁寧に繰り返しておきたい。私のなかには、この公演を見逃してなお平気でいられた人たちに、遅ればせながら、身悶えするほどの嫉妬心に苛まれて欲しいという気持ちがあり、この文は

まず第一にそれを目指して書かれたものである。（事実、今回、私自身も神奈川、あるいは静岡へ出向くことが叶わなかった点で、身悶えに近いものを経験している。）しかし、それは同時に、（そしてそれ以上に、）私自身がこの先も長くここ新潟の地でNoismを観続けていきたいがため、当たり前客席に埋まってくれることを願い、その「祈りと欲望の間」に揺れる気持ちを抑えようもなく、ある意味取り乱しながら書かれたものでもある。Noismの公演は常に、一瞬一瞬に輝く身体の非日常性で観る者を刺激し、ありきたりな日常を活性化してくれる希有な機会そのもの。平然と見逃すとしたら、もったいなさ過ぎる話だし、何より、舞台に躍動する研ぎ澄まされた身体センサーも、客席との交感を待っているはずだ。万難を排してでも、駆けつけて観る価値はあるだろうし、更に、それを越えて、Noismに対して能う限りの大きな期待を寄せたとしても、決して裏切られることはないと断言しよう。故に、今回のような不面目な事態を前にして、仮にも「サポーター」の端くれであるなら、嘆きながらも何もせず、ただ手をこまねいているのは許される態度ではないと感じ、度を失って、昔の「アジビラ」めいたものを書くに至ってしまった。仮に不興を買う部分があったとしても、『ZAZA』が示したクオリティの高さに免じてご容赦願いたい。

追記 5月26日（日）、新潟での楽日の終演後、前日は行われなかったカーテンコールがこの日は行われた。金森穰から退団するふたり、宮河愛一郎と藤井泉に花束が贈られると、「愛一郎さん、泉さん、今まで有難うございました」とばかり、感謝と労いの気持ちが万雷の拍手となつてりゅーとびあ・劇場全体に飜した。限りある時間を慈しみながら、そして、まるで、ふたりとの別れの時間を少しでも先送りしようとするかのように、いつまでも、いつまでも。

下村 伸（会員番号 No.373）



第2部〈囚われの女王〉

音楽：J.Sibelius《囚われの女王 The Captive Queen, Op.48》
出演：井関佐和子

第3部〈ZAZA〉

音楽：soundtrack by THE THE
《MOONBUG》《TONY》より抜粋
出演：井関佐和子・宮河愛一郎・藤井泉・中川賢・真下恵・青木枝美・藤澤拓也・宮原由紀夫・亀井彩加・角田レオナルド仁・石原悠子

『ZAZA』の3色と、私の「欲望」

りゅーとびあの劇場客席に座るまでに強く感じる3つの色がある。バス停近くの白山神社や、空中庭園の緑。チケットを切って足を踏み入れるホワイエの、まぶしいばかりの白。そして劇場の黒。1階後方から客席を見下ろした時に浮かんだ言葉は「ブラックホール」だった。悪く言えば暖かみがないのだが、Noismにはふさわしいような気がしている。

5月26日に見た『ZAZA』でも、この3つの色が印象的だった。

第1部『A・N・D・A・N・T・E』は白。白い紙片が丸く敷き詰められた舞台を、白い衣装をまとったダンサーがゆったりと動く。「白」が醸し出す「優しさ」や「神聖さ」に身を任せて…と思いきや、突然爆発音（のようなもの）が響き、やわらかな夢を破る。舞台上の「白」も「ダンサー」も美しい。しかし、「白」が「白」を維持して美しくあるために、ダンサーが常に美しく存在するために、どれだけの激しさが必要なのだろう・・・そんなことを思った。

この作品では井関さんが踊らないが、特に「不在」を意識することはなかった。複数のダンサーを視野に入れて舞台全体を眺めても、ダンサーのひとりを追いかけても、満足感がある。改めて「演出振付」という言葉を実感した。「演出」＋「振付」ではないひとつの世界。「主演」が誰か、「主演」が必要なのかは、観客が決めることかもしれない。

第2部『囚われの女王』は、「白」から一転、あふれるような赤・黄・緑が脳を刺激する。舞台の床に映る「緑」は自然界の「緑」と異なり、どこか怪しげだ。原色で閉ざされた空間の中、井関さんが「女王」「番人」「若い男」「英雄」を踊る。ただただ、圧倒された。「技術」や「表現力」を「評価」するのは他の誰かにお任せしたい。「とにかく凄い」、そう感じるだけで十分だったし、そう感じるのはごく稀な出来事なのだ。

女性ダンサーの区別が全くつかなかった『SHIKAKAU』から約9年、井関さんは少しずつ私の意識の中に入り込み、今は動かぬ根をはっている。Noism以外のダンス公演はほとんど見ないので、他のダンサーと比較はできない。けれども、私にとっては、多くの有名ダンサーを少しずつ見るよりも、井関さんの軌跡を細くとも長く見続けることの方が幸福だと思える。

金森さんがインタビューで、井関さんについて「年齢的にも、あと何回舞台に立てるか、何回踊れるかと考える時期にこれから差しかかる。」と話していたが、観客も同じ。明日の舞台を必ず見られる保証はない。作品のラストで女王が倒した壁の向こう側に、私も共に行けることを願いつつ、一回一回を大切にしたい。

金森作品には男女の役割を明確に分けたものと、男女どちらでも踊れるものがあると思うが、ひとりが短時間で男女を踊り分けるものは珍しいのではないだろうか。舞台において演者と役柄の性別を交錯させる意味と表現方法に興味があるので、その観点からも刺激になった。ただ、最初の字幕は少し長すぎたと思う。文字が与える詳細な情報と、舞台から伝わるイメージが相乗効果をあげていたとは思えなかった。

第3部『ZAZA』は、「黒」。「ブラックホール」というより「ブラックボックス」。何が入っているかわからない。開けたい…でも開けたら後悔しそうな…やばい雰囲気。箱。「闇」は全てを隠すけれど、「黒」はその前にあるものをくっきりと浮かび上がらせる。浮かび上がったダンサー達の「欲望」は、舞台上に散乱し、見る者を混乱させる。咀嚼も消化もできず、異物感がごろごろ残る。「演出」も「振付」もないような、でもそれが「演出」であるような。金森さんは「祈りへの昇華」ときれいな言葉を使うけれど、お手軽なカタルシスは与えてくれない。やっぱり金森作品には「黒」が似合う。

『ZAZA』で宮河さんと藤井さんが退団された。劇団「ピンクドクロ」公演は見られなかったけれど、この2人がダンサーの枠を超えた表現者になりうることは容易に想像がつく。「残念」と悔やむより、今度はどこで、どんな形で会えるのかを楽しみに。

私の「欲望」って何だろう？と考えると思いつくのは「見たい舞台を全部見たい」。中でも特に貪欲なのは「金森さんが踊る舞台を見たい」。今年は「シアンの家」高松公演でその「欲望」を満たして終わりと思っていたが、「PLAY 2 PLAY」に出演されると聞いて驚くやら嬉しいやら。金森さんの心境の変化か、必要にかられてのことなのか、理由はともかく、クリスマスプレゼント（新潟）とお年玉（神奈川）を待ち焦がれる子供のような気分である。

「出演者の怪我や舞台のトラブルがありませんように」「新幹線が止まりませんように」「急な残業が入りませんように」……どうやら、私の「祈り」は「欲望」が昇華したものではなく、「欲望」を満たすためにあるらしい。

安藤貴映子（会員番号No.73）

